# 「母に歌う子守唄」を読んで

新聞の書評、また「母に歌う子守唄－わたしの介護日誌－」というタイトルが目に留まり、購読した。

エッセイストである落合恵子が、主に、新聞、雑誌に寄稿した母親の介護の日々のエッセイを纏めたものである。

母親は、パーキンソン病、軽度の多発性脳梗塞、アルツハイマー病で要介護５である。

夜間の２時間おきの体位交換、等々の日々の介護の大変さも、さすがに有名なエッセイストにかかれば、かくもせつなくも暖かく、優しく表現できるのかと感嘆した。例えば、母親の介護しながら無意識に口ずさむ唄は、母親が自分が幼い頃に歌ってくれ唄……、また、母の一見無意味な宙を彷徨う手の動きが、幼い日に見たお米をとぐ母の手の動き……等々。

かって　母に子守唄を　歌ってもらった幼い子どもが　いま　母に　子守唄を歌う

「子守唄」とは　そのひとがあるがままの　そのひと自身でいられる　時空のことである（エッセイ集から）

もちろん、著者は有名な人権擁護論者でもあるだけに、介護保険制度、ヘルパー制度、医療、等々への鋭い視点もかいま見られる。例えば、「患者を意味する英単語、patient は、『我慢強い』という意味。心ある英語圏の人たちの間では、『サービスを受ける人』という意味の　consumer　という呼称に変わりつつある」との紹介。日本の病院では、医師や看護師に質問（文句）をいわない「我慢強い」患者が「いい患者」と思われがち。医療もサービス業なのだから、日本ではいつ consumer　が使われるようになるのかなあ。

「人間は、歳を重ねれば重ねる程、段々、子どもに帰る」という言葉があるが、エッセイ集から、娘が「母に歌う子守唄」が優しく聞こえてくる。

この本を読み、さあ自分も…と思うが、「親孝行、したい時には親はなし」。

（2004 年 11 月 13 日　記）